
最優の鍛冶師

夢魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最優の鍛冶師

【Nコード】

N1594V

【作者名】

夢魔

【あらすじ】

剣の道に生きる女子高生『仙道茜』は嫌悪する幼馴染の異世界召喚に巻き込まれ剣と魔法の世界『セレスティア』に到ってしまう。召喚された異世界人には元の世界の神が一柱だけ守護神として憑く決まりなのだが、茜を見初めたのは直接的な戦闘には不向きな製鉄・鍛冶を司る神『天目一箇神』。だが、超前向き思考な茜は帰還の手段がないと分かるや否や即断即決、剣士兼鍛冶師として異世界で生きていくことを決意する。主人公を巻き込んだ張本人は勇者として立身出世し自分だけのハーレム形成を目指していますが、主人公

は関知する気が更々ありませんので悪しからず。

「それで、何故貴様は此処に居る？」

私にもう付き纏うなと申し渡した筈だが」

何時も通り部活動の範囲での練習を終えた部員を見送ってから一人自主練をこなした黒髪の大和撫子『仙道茜』が剣道場を出ると、金髪碧眼の美青年が校門に寄り掛かって彼女を待ち構えていた。

彼の名前は『鬼道直也』。

茜も本心では認めたくはないだが、『仙道家』と祖を同じとする『鬼道家』の嫡子で、由緒ある仕来りを守り続ける仙道家とは異なり、時代の流れを汲んで企業として成功を収めた俗に言う成り上がりの家系である。その鬼道グループ自体も優良企業とは名ばかりで裏であくどい商いをしたり、果てはヤクザとも深い繋がりあるなどの黒い噂が絶えない。

茜と直也は所謂幼馴染の関係だが、今の美少女・美女ならば誰彼構わず口説き食い物にする下種な趣味を晒すようになってからは距離を置き口を利かないようにしていた。

が、年下から年上まで複数人の彼女がいるというのに茜にしつこく言い寄ってくるのである。そのせいで直也の本性を知らないファンが多いこの高等学校では女友達はできないし、彼女達を敵に回したくない男子共は明らかな嫌がらせも見て見ぬふりをするなど、彼女にとっては踏んだり蹴つたりの学校生活を強いられていた。

その元凶が一度懇切丁寧に迷惑だときっぱり告げたにも関わらず目の前に再び現れたのだ、その厚顔無恥さに不機嫌になるなどという方が無理だろう。

「へえ、この俺が態々こつちから声を掛けてやってるってのに相変わらず酷い言い草だな」

「誰も頼んでいない。」

私なんかに構っている暇があったら沢山いる恋人達の処に行ったらどうだ？」

「嫉妬か、茜？」

何時も言ってるだろ、本当に愛しているのはお前だけだって。何なら付き合っている奴らと今直ぐ別れたっていいんだぜ？」

「止めてくれ、私が刺される」

何故世の女共は、確かに容姿端麗で文武両道ではあるが、この上なく口先だけの最低男に悉く絆されるのだろうか。歩く二宮金次郎像なんかより余程七不思議に相応しいと思うが。と、常々考えている茜であった。

心の中で深い溜息を吐く少女には同情するしかないとして、問題なのは直也の思考回路だったりする。先程の嫉妬云々の台詞は冗談などではなく思ったままのことを口にしていたのだ。

彼にとって女性とは自分を愛して当然の存在で、特別視している茜もその例外ではない。よって彼女が拒絶するのは単なる照れ隠しや嫉妬なのだと本気で思い込んでいるらしい。

「まあいいさ。それより、偶には一緒に食事でも行こうぜ？」

「それも遠慮させてもらおう。」

この後、祖父との稽古の約束があるからな」

「……………っち」

茜の祖父『仙道誠一郎』は現代に生きる武士とまで言われる高潔な人柄で、警察や政界にも太いパイプを持つ大物中の大物。両親が幼い頃に死去した少女にとつたは親代わりで、人としても剣士としても尊敬できる傑物でもある。

自他共に厳しい誠一郎とは根っ子から水と油の関係である直也が何も言い出せず舌打ちしたのを茜は冷めた目で一瞥し、校門を潜り抜けようとした。が、突然肩から下げていた剣道の装具一式入った袋が凄まじい力で後ろに引つ張られる。

「直也ッ！何をッ！？」

「茜、助けてくれッ！！」

「！！！？」

当然彼女は張本人に抗議の声を上げるが、直也の慌てふためく声を不可解に思い後ろを振り向くと、彼の下半身が光の渦に嵌り今もずぶずぶと飲み込まれていくという奇怪な光景が目に入ったではないか。

茜にしてみれば離すのは造作も無いことだし、こんな女をとつかえひつかえするような屑を助ける義理もない。だが、生来の優しさからか彼女はそれを実行しなかった。

「ひいッ!？」

「もう……駄目だッ!！」

そして努力の甲斐なく、光の渦に呑み込まれた二人はこの世界から完全に消失。この出来事が仙道茜という少女の運命を大きく変動させ、更には異なる世界の命運をも左右することになるうとはこの時誰も予想だにしていなかった。

「……………んう」

茜が次に目を覚ましたのは、昔ながら日本家屋の居間に敷かれた布団の中。自宅と似た雰囲気なさっきの出来事は夢だったのではと都合のいいことを考えそうになるが、横合いから掛けられ声で完全に目が覚める。

「お、目を覚ましたな」

「あ、貴方は？」

声の主は縁側に座るキセルをくわえ無精髭を生やした、見た目三十代後半の男。左目を覆い隠す黒い眼帯は厳つさを引き立て、まるで気質な職人さんみたいだという印象を茜に抱かせる。また同時に、彼女の祖父のような武芸の達人と相対した時とはまた次元の違う何かに息苦しさを感じていた。

だが、そんなものも男の次の一言で吹き飛んでしまう。

「俺の名は『天之麻比止都禰命』、又は『天久斯麻比止都命』。
あめのまひとつねのみこと あめのくしまひとつのみこと
長ったらしいから天目一箇で構わん」

彼が名乗ったのは日本神話に於いて製鉄・鍛冶を司る神の名前。当然普通の人間なら相手の正気を疑うであろうが、茜には目の前の自分は神だと称する男が虚言をついているとは思えなかった。それは偏に、悠然とこちらを見つめる天目一箇から感じる桁外れの威圧感―この場合、神威とでも言うのか―が神たる存在の証だと思えたからだった。

人間、精神的動揺が許容範囲を大きく振り切ると逆に落ち着くことがあるというが、茜の場合は日課にしていた禅寺での淹に打たれながらの精神修行の成果もあってか本来の冷静な自分に立ち戻る。

そこで目上？の人間？に対して著しく礼節を欠いていたことに気づき、直ぐさま乱れた着衣を整え佇まいを正してから挨拶を返す。

「御身が神とは露知らず、失礼しました。」

私の名は仙道茜と申します。以後、お見知りおきを」

「そう畏まらんでいい。これから永い付き合いになるのだからな）この娘、中々肝が据わつとる。………面白い）」

「は、はあ」

何に機嫌を良くしたのか美味そうに白煙を吐く天目一箇の言葉の意図を理解できなかった茜には首を傾げるしかなかった。

#001

一服終えた天目一箇が語った茜自信が今現在置かれているという状況は荒唐無稽さえも通り越して常軌を逸してさえいた。さもありなん、彼女はこれから慣れ親しんだ国、いや世界とは全く異なる場所へと誘われようとしていたのだから。

「異世界召喚、ですか？」

ネットや所謂二次元的な文化に見たり触れたりした事がなく、パソコンすらも満足に扱えない茜にしてみれば、『異世界』『召喚』などの単語はそれ単体として意味は理解できるが、合わさってしまえば解読不能な熟語に早変わり。要するに彼女にとってはファンタジー、いわゆる空想の産物などに関する知識は幼い頃に読んだ日本昔話やグリム童話などの御伽噺止まりなのだ。

一生懸命理解しようと眉間に皺を寄せる少女を見て苦笑した天目一箇が再び口を開く。

「ま、お主の経歴からして今直ぐ理解しろってのは無理な話だろう。追々、実感することになるだろうから焦ることはない」

「????……天目一箇殿は私のことをご存じだったのですか？」

「大凡だが把握はしている。」

此処は生命が芽吹く内郭世界『出雲』を守護する役目を負った八

百万の神々が住まう外郭世界『高天原』^{たかあまはら}。出雲に存在する生命体の全ての情報をデータベース化し保存している。尤も、記されているのは人間の上辺部分だけ、これだけで本質を見極めることはできな

彼の口から語られる世界の仕組みに少女は驚きを隠せなかったが、努めて平常心を装いながら与えられる情報を自分なりに噛み砕いて吸収していく。

と、そこで一緒に謎の渦に飲み込まれた筈の幼馴染みのことを今更ながらに思い出した茜は眼前の男に取り合えず尋ねてみる。

「そついえば直也の奴は……っ!？」

現状を把握する事に精一杯の彼女にとって心底どうでもよかったのだが、返ってきた天目一箇の反応は抑えようのない憤怒と明らかに侮蔑が入り混じった憎しみにも似た感情の発露だった。

突然雰囲気豹変した目の前の神から放たれる殺気^{しんい}にも似た神威に、過敏に反応してしまい思わず後ずさり膝立ちになる少女。彼が次に紡いだ言葉には誰に対してかは明らかで濃密な殺意と、茜自身何となく察していたとはいえども認めたくない真実と覆らない事実が含まれていた。

「あの男なら、早々に説明を済ませ旅立たせた。

……巻き込んでおいて、二度と故郷の地を踏めない境遇にしておいてまだお主に会わせるなどとぬかしおったわ!！」

「そう……ですか」

二度と我が家に帰れないことには深い悲しみを、巻き込んだ上にまだ執着を示す男に対しては酷い憤りを抱いた少女も、まるで自分の事のように怒りを露わにし、嘆いてくれる壮年の男性に少しだけ救われた気がした。

数分後、未だ頭に血が上っている様子の天目一箇が落ち着きを取り戻すまで、茜はというと与えられた情報の整理に意識を傾けていた。

「（現時点で判明したことは五つ……一つ、異なる世界の何者か――召喚という言葉から第三者の意志が介在していると判断――が何らかの目的で直也に対し光の渦を発生させ拉致を企てたこと……二つ、それを図らずも阻止しようとする形となった私は不運なことに一緒に飲み込まれてしまったこと……三つ、私の現在位置は元居た内郭世界『出雲』を覆う八百万の神々が住まう外郭世界『高天原』の何

処かに在る天目一箇殿の屋敷の居間であること……四つ、直也は既に此処を發ち召喚者？の元へ向かった後だということ……五つ、私はもう故郷へ帰参の叶わぬ身の上だということ」

一部憶測が混じっていたものの、彼女の推測はほぼ正解と言っても差し支えない程正確に状況を捉えている。ただそうすると、当然新たな疑問が浮上してくるのは必然。

頭に渦巻く疑問の数々を解消する為、荒々しく白煙はくえんを吐いて昂ぶった気持ちを静めようと努めている天目一箇に声を掛けようとするが、突然庭先に現れた第三者が意図せず阻んでしまう。

「おう、天の字。約束の酒、持って……きた…ぞ？」

男はよれよれの袈裟を着た、お世辞にも小綺麗とは言えない身なりの坊主頭の巨漢。背には茜の身体をもスッポリと納めてしまえるのではないかと錯覚してしまう程に巨大な酒壺さかつぼを背負っている。

茜自身は会ったことは一度もなかったが、破戒僧とはこういう風体ふうていの人物を指すのではないのだろうか、と彼女は全く関係ない上に正直どうでもいい事を考えていた。

坊主は何時ものような受け答えをせず不機嫌面のまま視線を超越さない友人（天目一箇）と、自分をまるで不審者を見るかのような胡乱げな瞳で観察してくる少女（仙道茜）を交互に眺めた後、見事な光沢を放つ頭部を掻きながら一言呟く。

「……………儂、何ぞ悪いことしたか？」

こぼした声は誰の耳にも届かず、ただ庭園に設置された鹿威しが
発する小気味良い音だけが響いていた。

#001（後書き）

今後の参考や励みになりますので、感想や評価を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1594v/>

最優の鍛冶師

2011年9月10日22時46分発行